シンポジウム／アイヌ・女性・口承文芸

聖伝にみる神話構造と叙述

— アイヌ・女性・口承文芸 —

藤井 貞和

聖伝（＝オイナ）を独立したジャンルやまとまりとして認めるかどうかは論点であって、私の今回、そのことを頭のどこかに置きながら、久保寺逸彦『（アイヌ叙事詩）神話・聖伝の研究』（岩波書店、一九七七）を、アイヌ語資料および久保寺の日本語訳から読みぬこうとした。聖伝十八篇をとりあげて、〈養姉〉を見極めながら、それらの神話叙述を略述する。四人称叙述の見渡し、〈文法化〉以前の視野、神謡について、〈昔話の語法〉（リュティ／小澤理論）と神話叙述、と言った話題をも用意するだけはした。日本口承文芸学会当初からの会員である萩中美枝氏をお迎えしての今回の例会であり、企画した石井正己氏の尽力による成果でもある。

日本口承文芸学会は世界の口承文芸を対象とする日本での学会であって、日本社会をフィールドとする他の複数の学会とは存在意義を異にする。萩中さんの研究を初めとして、アイヌ文学研究が本学会の重要な一角をなす理由である。石井氏がまとめるように（『伝え』42号）、今後、〈アイヌ〉を視野に入れ

ない「女性」や「口承文芸」の研究に豊かな実りは期待できない。二〇〇六年以来、本学会の例会部門は「女性」をテーマにしての企画を重ねてきた。それが「アイヌ」と出会うというシーン、しかも萩中さんを迎えての実現は、起こるべくして起きた事件であると言える。

一言させてもらおうと、柳田國男があえて「口承文芸」と呼称し、さらには女性民間伝承研究の創始者が柳田そのひとでもあるために、まさにそこに嵌るとい**は**現象をまぬがれない、今回の企画だったように思われる。Iterature（英）の翻訳語は現代なら「文学」でよいと思われる（「文芸」でなく）。三年つづき、せっかくの「女性」というテーマであるにもかかわらず、司会の石井氏のさいごのまとめが柳田の女性研究に言及して、柳田的民間伝承学へ回収することき発言で締めくくられたことは残念であり、そのことは懇親会の席上で石井氏に直接、申し上げた。学会名にしても日本口承文芸学会が視野にはいつてきてよからう、とも。『伝え』42号に石井氏の書かれる、テーマをめぐって〈ゆらいだ〉といわれることの一つに、みぎのことがあったかもしれないと思え、受け止めておく。

久保寺著書から気づいたテーマとしては、養姉と主人公（男性）との関係に性的関係がないこと（兄妹伝承の変型）、養姉はときに「人食い鬼」でもあるという、両価性を指摘した。戦争の起源、語りとして読む場合、ポン・フチ「ユーカラは魅えり」の、主人公は「てぶらで向かい、てぶらで帰ってくる」と

いう一節を思い起こす。神か人間（アイヌ）か、自然との闘争、味方する神々（善神）という両価性も指摘できる。配偶者の決定には闘争が見られる、などの話題があるとした。

聖伝1（平賀エテノアの語り、四七八行） 養姉の兄である神髪彦が退治にでかけて殺されてしまう。男主人公が大沼へ行って奮闘のすえにこれら、オオアメマス、川瀬の妖魔と、蛇体の魔物（＝飛龍）を退治ると神髪彦は生き返る。四七二行以下は久保寺が補ったから、「アイヌラックル、その身の上を物語りぬ」という締めくくり及び、「自叙」する男主人公がアイヌラックルであるかどうかを確かめられない。

聖伝2（平賀ツモンテの語り、二八五行） オオアメマスを退治る。大禍神、沼主の神、飢饉魔の神で、これを切り刻む。沼の端の神々の死骸が眠りから覚め、わが（養）兄もいる。男主人公が沼の縁をゆりうごかすと、山津波が起きる。「自叙」はアエオイナ神だと言つて締めくくられる。オオアメマスが自然の脅威を形象化して文化神と戦うあいとして位置づけられている。さいごに人間の幣や酒がとけられるので、アエオイナ神はけつして人間でなく神であると思われる。

聖伝3（平賀エテノアの語り、一三三〇句（『アイヌの神謡』では一二二九句） 養姉からの語りで男主人公は自分の父が歳神であること、母は春楡の木（＝火を鑽る樹）であることを知る。養姉から言われて男主人公は出陣し、諸斃れとなる。大魔神は小山に手足をはやしたような、顔が崩れ崖云々というから、

自然の脅威の象徴的存在とわかる。「人間の姿に我を見られてはいとわしい」と霧をめぐらせるなどは、巨魔をして「おまえは神か人間か」とくぐもつた声で言わせる。斃れた自分の死体がぶらりと下がっているのを見置いて漂泊をつづける。川瀬の神たちの賠償の品々を飛び越え飛び越え、水源から空へと昇つてゆくと、狼が噛みつきこうとするので、逃げてもと来たみちをたどり、自分の死体のなかへ真つ逆さまに落ちる（蘇生する）。美しい少女が巫歌をうたう息吹がかかると、わが傷はたちまちに癒える。少女（狼神の妹）は山城へ帰る男主人公の背後をついてくる。男主人公の名はわからない。神であるよりは人間Ainuであるとの性格付けを観察することができよう（サケへあり）。養姉はオプタテシケ（大雪山）の守り神として天より遣わされた女神で、春楡の木から若君を投げられて養育しているという。

聖伝4（平賀エテノアの語り、六二六行） 養姉が男主人公に危機を知らせる。「高天原からの手紙によると、人間界に天降らせようとした幣神たちを、巨魔の神がかどわかつて、箱から出られぬようにしている、いざ行つて探し出せ」とのこと、苦心のすえ巨魔を屠る。善神たちである幣神（榛やエンジユ、ニワトコなど、それぞれ名前がある）を吊つて終わると、アエオイナ神が語る。

聖伝5（平賀エテノア、六六六行） は一転して、養姉が人鬼だという話。男主人公を守り育てる女性であるとともに、

男主人公によって殺される。野宿して火を燃やしながら、ユカラ、オイナなどをうたう。斬られた養姉が男主人公の夢にあらわれて、自分は汝の父君を殺し、母なる媛神をも食い殺した、山人の魔であると告げる。

聖伝6 (同、二二〇行) 小オキクルミの「自叙」。すべては男主人公の夢のなかでの話として語られる。養姉として育ていくつくしむ、めのと的存在が人食い鬼でもある。うたの発生にかかわるところも聖伝5におなじ。

聖伝7 (平賀エテノア、三七九行) 養姉は食料を家から持ち出して、人間たちを救おうとする。「国姥、大禍神、かの魔神、大魔神」＝飢饉の神で、神々の村も人間の村も、滅ぼされそうになる。そこで食料を持ち出したという次第。アエオイナ神は飢饉の女魔を討ち、シシリムカ川をさかのぼって、飢餓神のしかけた網代を破壊し、魚どもが遡上できるようにする。山原を駆けまわり、かんじきのさきより雪塊を飛ばして、鹿の群と化し、魚群とする。文化を生む英雄であるアエオイナ神の面目躍如たるものがある。

聖伝8 (平目カレピアの語り、一五六行) 男主人公が退治におもむくと、大禍神(魔神)は飢饉の雪掻きを手を持って、「飢饉の雪、国原の上に、散らし散らし、雪を融かせ、トリキンカタ」「雪を融かせ、飢饉にしろ、飢饉にしろ、トリキンカタ」と唱えている。仕留めると、それから雪原に鹿が飛びはね、川には魚どもが群れ泳ぐようになる。危機を脱する

とアエオイナ神は語る。

聖伝9 (平目カレピアの語り、九五五行) 男主人公が浜へおりて行くと、お告げ神、囁き神に出会う(青大将神)。囁くことには、「オキクルミ神よ、沖の国人の領海と我が本州人の領海とのあいだに、船二百艘がやってくる。遡え討つ準備をしろ」と。草芻神(＝草人形の神)を六十作り、魂をいれて海岸に立てると、疱疹神の弟神と飢餓神の弟神とだけが逃げ去る(あとは皆殺し)。草人形の神たちもあらかた殺されるが、のこったのは変生して河童神(みづち神)になる。

聖伝10 (平賀エテノアの語り、二三九行) 大青大将の神に教えられ、棒幣の神を作り、草人形の神を招きおろし、夥しい舟群へ向けて立てる。戦いののち、負けた統領の疱疹神は、和人の国、沖の国人の国へ帆をめぐらして去る。棒幣の神も草人形の神も、波の穂のところに眷属とともに棲まわせる。アイヌも和人もこれからは、沖で暴風雨にあつたら、アエオイナ神の作った両神に助けを唱えるべし、とアエオイナ神は言いのこして高天原へ昇天する。青大将の神はチロチロ舌を出すのが言葉を囁くように感じられる。

聖伝11 (二谷国松、一〇三行) 男主人公の妹が腹痛に苦しむ。そこで、「わが言う次第を聞きたまえ。シシリムカ川をさかのぼると、漣沼の主神は、兄＝雲沖放け彦、弟＝雲寄せ彦、煤水沼の主神は、シカトルケ彦、シカトルケ媛、山の上の沼主は、朽ち彦、朽ち媛で、雲沖放け彦はシカトルケ彦の妹神を妻

にし、雲寄せ彦は朽ち彦の妹神をめとっている。神々は多くとも、幌尻岳の神にはみな聴いて従うものなのに、いまわが妹は腹痛に苦しんでいる。もし死ぬようなことになる、神々は人間の国に棲めなくなる、幌尻岳の神が第一に詫びの言葉を言わねばならぬ」と、祈詞を述べるといふ展開。幌尻岳の神をはじめとして、神々の責任であると、アエオイナ神は神々を責めたり祈ったりして妹を平癒させる。四人称叙述で、これを聖伝として認定したのであろう。

聖伝12 (平目カレピア、一〇三句) 「自叙神未詳」。「オキクルミ神の偉大なことを讀える説話」であるが、「オキクルミの自叙でなく、他の何神かが自叙」したのだという。「すべて三人称叙述で運んでいて、一般の神謡のようではない」とあるが、神謡篇へと組み替えてもよい。隣国に黄金のエゾ松が天際にこずえ高くそそりたっていて、神々が一枝も切り剥ぐことができなぬ。神々の仮小屋がそのしたに並ぶ。一日、むさくるしい老爺、老婆が歩みきて、錆だらけの鈍と包丁とで、くさめの鼻汁、咳の鼻汁を身につけて、神々の嘲笑を受けながら、鼻汁をこねて鈍と包丁とで、黄金のエゾ松を切り倒す。「どんな神か、どんな人 *nio* か」と神々は考え尋ねても、よくわからない。オキクルミ神とその妹神とがやって来てやったことではないかと、神々は鼻をつまみながら、驚き嘆じる。

聖伝13 (二谷国松、一二二行) オキクルミ神の「教訓」だところ。kashpatte は、kash (上) pa (口、こゝろ) otte

(あらしめる、多く言う)。蟬 *せみ* に教訓して聞かせる。(うるさきことかな！ やかましい蟬に、その根元を聴かせてやろう。昔、その昔、崖下の村の老媪がいみじき巫女で、大山津波を予言しながら、自分だけは避難せずについて、遙かな海上へ流され、屋根のうえで泣きつづけてうるさいので、神々により蟬に身を交えられ、夏は人間の国に、冬は神々の国に棲むことになる。汝の根元を言い聞かせたからには、神々の国へ帰るようにと、オキクルミ神が教訓する)。

聖伝14 (平賀エテノア、一九七行) 養姉が山狩りにゆくときは、「外へ出ると人盗り鳥、人かどわかし禽がいるから、けっして外に出ないように」と言い置いて、土まみれの肉、泥まみれの魚をとってくる。姉の塞ぎ忘れた犬穴から外へ出て、弓矢遊びをしていると、沖から男が泳ぎ近づいて、山へ行こうとするので、「昔、その昔、村造りの神が海に投げ捨てた木が、化成して太刀の魚になったのだから」と言う、青ざめて、「さすがに親の子だけあって傑い若君だ」と言いながら、一尾の太刀魚となって泳ぎ去る。姉が土まみれの肉、泥まみれの魚を背負って返ってくる。男主人公の呼称は見られない。

聖伝15 (平賀エテノア) 一〇九二行という、長い説話で、男主人公はある日、しきりに山入りしたくなる、鹿を捕って姉に食べさせ参らせんと。山辺には人盗り鳥、人摘り禽が群がり棲むと、養姉の止めるのを聴かず、出で立ちをととのえる。行く手にあらわれた大鹿を狩り、肉を背負って山をくだる。大沼

にテンコツ・チェツポ（魚）を見つけて、これを捕ろうと裸体になる。その姿を美女に見られ、憤って陸へのぼり、霞の人の形を作つて自分に見せかける間に、急いで装束をつける。草小屋を作り、かの女とともに泊まり、眠っているすきに外へ出て、小屋に火をかける。焼死した女の死霊が鳴り轟く音とともに去る。養姉はその少女が雷神の妹で、主人公とは許嫁であること、それを焼死させたからには、兄の雷神から試練を受けると語る。戸外に立ちつくして試練に耐えると、雷神の妹が髪の毛の焼けこげた姿で、天から下りてくるも、主人公の憤りは解けない。養姉が主人公の憤りのわけを妹神に語つて聞かせる。養姉は雷神のもとへ嫁ぐべく天へ昇り去る。姉に代わつて、雷神の妹と暮らすことになるとアエオイナ神は語る。

聖伝16（平賀エテノア、六五三行） 主人公は山狩りにかけて、女がうたう声を聞いて、肌脱ぎしているその女の後ろから乳房を掴む。自分は村造りのために高天原からおろされた淵主の女神で、石狩を領する神、西浦の神を夫とすることになっている、なのにあなたのさきほどの振舞いは、石狩の神から難題（試練）を受けることだろう。はたしてもの凄い音とともにやつて来て、長い戦いがはじまり、憑き神同士も戦う。互いに一所にとどまり、戦う間に、女は薄手の折敷と椀に飯の高盛りをよそい、（私に）食べさせる。それからまた戦うあいだに、さいごに手応えがあつて、石狩の神、西浦の神はどうと倒れ、死霊が身をはなれてゆく音が鳴動する。例の女が莫塵袋を

背負い、やつてきて暮らすようになると、アイヌラックルは語る。

聖伝17（平目カレピア、二三七行） 養姉が鹿の肉を所望するので、川沿いのぼると、山頂の沼のほとりに女が両肌ぬぎになつている、主人公が後ろから乳房を掴む、すると女は「我には西浦の神という夫がいる。嫉妬深いから、一足もあとしざりすることのないように」と。神の雲とともに西浦の神はやつて来て、戦いをいとむ。立ちつくして闘い、ついにうち勝つ。姉はあきれるが、沼の女神を連れてきて、ともに暮らすようになる。若君 warime を特にアイヌラックルとは言っていない。

聖伝18（平賀ツモンテ、七〇七行〈原詩〉） 梗概だけ載せられており、原詩を載せなかつた理由は「伝承に脱漏があり、かつ叙述の人称法などにも不揃いのところが多いので、割愛することにした」とある。金田一の言う神伝（『アイヌ神典』一〇九八ページ、サケヘなし）と比較されるべき雄編であるけれども、サケヘはあり、原詩が載せられていないこともあり、人称法の実態がわからない。

参考文献については、藤井「物語人称と神話叙述——（聖伝）にみる」（『声とかたちのアイヌ・琉球史』（吉成直樹編）、森話社、二〇〇七）に挙げた。

（ふじい・さだかず／立正大学）